
あなたに逢いたくて

愛田雅

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

あなたに逢いたくて

【Nコード】

N4199C

【作者名】

愛田雅

【あらすじ】

主人公の田辺陽子の前に、教育実習生の大塚先生が現れて・・・。

あなたに逢いたくて

私が、中学3年の時、それはあった。そう、あの時、あの先生と私は出逢ったのだ。先生は、教育実習で私の学校に来ていたのだった。見た目は、はつきり言って二枚目タイプではなかった。でも、私はなぜか先生に惹かれるものを感じたのだった。

教育実習の始まる数日前には、担任の先生から教育実習生が来ることを告げられていた。たったそれだけのことなのに、新しい先生が来ると思うだけでわくわくしてしまった。もちろん、先生はずっと私たちの中学校にはいないけれど。

「今日から2週間、教育実習としてこの学校に来ました。えーっと、名前は、大塚秀平です。よろしく！」

まだ大学生の大塚先生は、黒板に大きく自分の名前を書くと言った。さわやかなんだけど、字はとても汚かった。

大塚先生の授業を終えた直後の休み時間になると、私は真後ろの席に体を向けた。

「ねえねえ、陽子。あの教育実習の先生のこと、どう思う？」

「ほえ？」

私の友達の、吉田恵がそう言ってきた。

「どうって、何が？」

私が、恵に聞き返した。突然、どう思う？ って言われても、あまりにも質問の内容が漠然としていて、何が聞きたいのかわからない。

「さわやかな感じで、ちょっとイイ感じじゃない？」

恵は、大塚先生にかなりの好印象を持っているらしい。

「そうだね。若々しくっていいかもね」

恵の言葉に動揺していた。もしかして、ライバルなのかなって思った。決して二枚目ではとは言えない大塚先生だけど、誠実そうで

憧れてしまっ。

「やっぱり、そう思う？ 同級生たちとは違うさわやかさがいいんだよね」

頬杖をついて、さっきまで大塚先生がいた教卓を恵は見ていた。

さすがに、私は恵ほど大塚先生に好意を持っていないなと思った。そこまでうつとりした顔は、今の私にはできそうにない。

そんな私が、教師になるんだと思わせるようになったのは、この直後であった。

「ねえ、陽子って看護婦になるんでしょう？」

「うん、看護婦になって人の命を救うのだ！」

私は、いつもそう言っていた。小さいころから、看護婦にあこがれていた。白衣を着て、患者さんに優しく接し、そして、患者さんの命を救う。なんて、かっこいいんだろう。

「看護婦って大変だと思うけど、まあ、陽子なら平気かな？」

こんなことを言っていた私が、何故教師の道を選ぶことになったのか……。

放課後、恵と私は、大塚先生にいろいろと話を聞くことにしてみた。ホームルームが終わると、二人揃って大塚先生のいる教卓へ行った。

間近で大塚先生を見ると、とても背が高い。他の男子と比べても背が高く、今までこんなに背の高い男性を近くで見たことはなかった。ほんの少しドキドキしてしまった。

教室をすぐに出ようとしていた大塚先生だったけれど、私たちに気がついてその場で待っていてくれた。その表情はにこやかで、学校の先生という職業が好きなのだろうなと思わせた。

「ねえ、先生ってどうして先生になろうと思ったの？」

単刀直入に聞いてみた。今、先生って仕事は大変だっと思うし、つらいことも多いはずなのに、どうして中学校教師を選んだんだろう？ って思っ。

大塚先生は腕を組んで、少し間をおいてから答えてくれた。

「そうだなあ・・・、俺が中学のときの担任がすごく良い先生でさあ、俺もあんな先生になれたらって思ったって感じだな。」
「へ〜。」

恵がなるほどと言いたげにそう言った。

その後、私たちは、いろいろな話を大塚先生とした。それが、ものすごく楽しかった。きつと、この時に私は先生に惹かれるものを感じていたのだろう。そして、私も教師になりたいという心の種を蒔かれたのだと思う。

次の日も休み時間に質問をしたり、放課後には世間話などをしていた。たったそれだけのことなのに、とても楽しく感じた。

まだ、恋だとは気付いていない自分。でも、先生と話がしたいと思う心。その心だけで、私は、毎日先生と話をしたのだった。

1週間がたち、その週は私が教室の掃除当番になった。

「おっ！ 今日から田辺は教室当番だな。しっかりと、掃除しろよ〜！」

放課後になると、すっかり仲良くなった私に大塚先生がちょっとかきを出してきた。

「失礼ねえ。私は、先生と違って、ちゃんと掃除します！」

「言ったな。目を皿のようにして田辺が掃除してるところを見るからなっ！」

「どうぞ、ご覧ください！」

もちろん、私はしっかりと掃除をした。しかし、先生も手伝ってくれた。

「頑張ってるじゃないか。」

「先生もね。」

そう言いながら、みんなで掃除をした。私が、机を運ぼうとして、机をずるずるひきづっていたら・・・。

「お前、ちゃんと持てよ。みんな、ちゃんと持ってるだろう。」

「重いじゃん！」

そうなのだ。すべての机の中が空というわけではなく、教科書を置いて行っている人や、掃除中の人の鞆が置いてあったりして、重たい机が多かった。

「力ないなあ。よし、俺が運んでやるから、しっかり掃くんだぞ。そのあとは雑巾がけな。」

「らじゃ！」

優しいなあ……。怒られるかな？って思ったけど、怒られなかった。普通は、何が何でも机を持たせると思うんだけどなあ。こんな私のことを女の子としてみていてくれるんだ……。そう思った。クラスの男子とは大違いだ。

ズキンッ

えっ？

もしかして……。私……。

この時に、初めて気がついた。先生に恋してるんだって。先生のやさしさに触れて、やっと気がついたんだ。教室掃除の当番にならなかつたら、気がつかずに終わっていたかもしれない。そして、教師になることもなかったのかもしれない。

そんなこんなで、2週間はあっという間に過ぎてしまった。

「えーっと、今日でみんなとはお別れです。寂しいけれど、みんなからいろいろなことを教えてもらいました。俺からもみんなにいろいろなことを教えたつもりですが……。俺が、みんなから教わったことのほうが多いかな？ えっと、俺は、これから頑張つて中学校の教師になりたいと思います。みんなも自分の夢をあきらめずに、頑張ってください。夢は、かなえるためにあるものだと思いますから。もし、道端で俺に逢ったら気軽に声でもかけてください。」

先生は、照れながら最後のお別れの挨拶をした。

私は、心の中で、たくさん先生には教えてもらったよって言っていた。そして、頑張つて良い先生になつてね！ って。そう思いつつも、やっぱり、心の中では泣いていた。もつと、ずっと先生と一緒にいたかった。教育実習生なのに、とつても教育熱心だったし、優しくかつたし、明るくて、楽しくて……。

「良い先生だったねえ。」

恵が言った。気が抜けて寂しそうに聞こえた。やっぱり、先生は誰から見ても良い先生なんだなつて思つたら、ちよつとだけ嬉しくなつた。

「そうだよねえ……。ちよつと寂しいよねえ。」

「うん。ずつとあの先生に教わりたかつたよねえ。」

先生は大人気だった。若いつて言うのもあるんだろうけど、明るくて元気で優しくて……。本当に良い先生だったから。

偶然に先生に逢える事を期待してみたけれど、結局、そういうことはなかった。でも、私は先生に逢う為に、先生に刺激を受けて、中学校教師になろうと決意した。

そして、今、私は教員免許を取つた。そう、大塚先生に逢う為に。大塚先生のような先生になりたい為に。看護婦になりたかつた私を教師の道に変えてしまった。本当に良い先生だったから。教育実習生のときにあんなに良い先生だつて思わせたんだから、きつと、今でもすごく良い先生でいるはず。

大塚先生と同じ学校に行けるかな？それは、ちよつと難しいと思うけど……。

いつの日か、大塚先生に逢えますように……。

(後書き)

数年前に書いた小説です。続編を近日公開予定です。

あなたに逢いたくて

あなたに逢いたくて

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4199c/>

あなたに逢いたくて

2009年3月24日10時19分発行